
僕の素晴らしい一日

よっちゃんさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の素晴らしい一日

【ZPDF】

Z9175B

【作者名】

よつちやんせん

【あらすじ】

「普通の高校生。彼女もいないから、もちろんHッチもしたことがない。そんな僕がこんなに素晴らしい一日を体験することにならなかったのは。

僕は「ぐく平凡な高校生だ。特にめだつたこともなく、もひるん彼女もいない。

そんな僕に夢のような日がやつてじよつとな。

今日も遅刻しそうで僕は家を飛び出した。今日も夢のなかが楽しすぎたから寝過ぎてしまったんだ。

「夢のなかじやなきやあんなことできねえよな（笑）」「そんなことをいいながら家を飛び出したら、

「キヤッ。

家の前の交差点で女子高生にぶつかってしまった。「なにするのよ！」「怒ってる。僕は女の子の上にじかかっていた。もひるん、

不用意にだ。しかし、

「ちよつと、あなた本気！？」

そう、僕のあそこは朝起きたときから朝立したままだつたのだ。僕はあまりにはずかしくなり、

「すみませんっ！－－それじやあにそいでのーー。」
すばやくその場から逃げようとした。すると、

「別にいいわよ。」

え？？

僕は耳を疑つたがすばやく相手の顔から脳からおじつまで観察して

いた。顔は目がくりつとしているが、髪は茶髪でいかにも

「エッチ」であった。パンツが見えてる。

「朝から元気がいいのね。結構タイプよ。そこもオッキイしね（笑）

「

ツンツンした顔がハニカンだ。僕は不覚にもムラツとした。

「なにを言つてるんですか！？いまから学校だし、意味わからねえだろ！！」

理性で本能に勝ちたけど僕のあそこはやうに固くなつている。

「大丈夫だよ。」といきなりふとこひに入つてきて僕の顔をみあげてくる。くじつとした目で。

おっぱいの感触がつたわった。おもわず抱き締めた。彼女は僕のをズボンからとりだし、コキコキしあじめた。

僕は本能を開放した。

「かわいいなあ。おっぱい揉んでいいよね？」

「はあはあ、キスしてほしいの。揉みながらキスして。」

おっぱいを出したいけど、初めての僕には制服のはずしかたがわからなかつた。

とりあえず押し倒した。広場に押し倒した。誰に見られてもかまわないや。

「はあはあ、おっぱいをだしてくれ。」

「いいわよ。はやくもんで！！」一瞬にしてきれいなピンクの乳首が見えた。すぐに揉みだした。

「はあはあきもちい。ねえ、きもちい？？」

「う、うん
おまえ名前は?」

「あつ」よ、ああつーあんー！」

僕は固くそそりたたあそ」を彼女にやし」んでいた。

腰をふる。かつてない快感が身体中を走る。彼女の声がとても子供っぽくてかわいい。

「アリス！アリス！」アリスは叫んでいた。

「うふう。上手いな！大子きじよーーー！」
彼女のなかにだしてしまつた。とてもさわやかだつた。彼女を抱き締めると、すごく満足そうに、

「僕は電話番号をこうかんし、学校へ向かつた。学校につくとすでに四時間目。担任のももこ先生は「いつも、遅刻なんてしないあなたがなぜ？？あとで保険室にきなさい。」

なぜ保険室？と思つたが、

「はい!」とだけいつて昼休みにはいつた。

昼休みはいつもより弁当がおいしかった。すばやく弁当を食べると保険室に向かった。

トントン

「失礼します。」

入るとともに先生が椅子に座っていた。

ももこ先生は鼻筋のきれいにとおつたいわゆる美人である。今日もわざと胸を強調するような水色のセーターをきていた。

「ここに座つて。」

ももこ先生のすぐ前には椅子がおいてある。すぐに座ると胸の大きさに驚いた。

「あなた　　今日はなんで遅れたの？」

「僕　　その　　。。。」

あまりのおっぱいの大きさに言い訳がでこない。

「わからぬいけど、あなたは悪い」とした。あなたには先生のゆうことをきいてもらいます。」

先生が僕を抱き締めてきた。おっぱいに顔がうもれる。

「じゃあまづはがまんしてもらつわね（笑）手をださないでね。」

先生はいきなり畳の前で服を脱ぎはじめた。黒いブラジャーにおっぱいが詰まっているようだ。ムラムラしてきた。

「先生ね、前からあなたが好きだったのよ。かわいい顔して。おかしてやりたかったの」

先生は畳の前で下着姿になつた。その上に保険室にあつた白衣をきて、中のブラジャーをはずした。おっぱいの形がきれいに浮き上がつている。見えそうで見えない。ムラムラがおさまらず、

「揉んでいいですか？」ときいたが

「ダメよお。あなたのたてる顔をみたいの。動いたら負けよー。」

と言いつつ、僕の目の前でおっぱいを揉みながら、

「あつ。あつ、ああ～ん」とあえぎ挑発していく。

「せりしゃつぶつて」田の前におっぱいが現れた。しゃつぶつてみると

「ああん。きもちいい。ああつ」

とあえいでいる。僕は襲いたくてたまらない。我慢の限界にきている。

「今度はぱいぱいしてあげるねつ」と言い、先生は僕のそれを、大きなおっぱいではさんできた。

上田すかいのかわいい顔に我慢できなくなり僕はいつてしまつた。
「ウフフ。かわいいわねえこれくらいでもうしゃべりしちゃつて。ああ、好きにして。」

先生はベットによじこなつた。すぐに上に乗り、挿入する。

「ももこ先生っ……うああ……」とてもすばやく腰をふつた。快感だ。

「あああああこしゃー……うはははあはあちんちんおつかーつ……あああつ……」

先生の割れ目から液体がながれている。僕と先生、それぞれのいやらしこ汁だ。

僕は上機嫌で保険室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9175b/>

僕の素晴らしい一日

2010年11月18日14時22分発行